

平成 30 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02409

研究課題名(和文) 言語と文体の階層制に関する研究 イタリアの「言語問題」を中心として

研究課題名(英文) Study on the hierarchy of language and style ----with a focus on the "Questione della lingua" in Italy

研究代表者

糟谷 啓介 (Kasuya, Keisuke)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：10192535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ダンテの『俗語論』が提示した「高貴な俗語」の理念をいかに解釈するかという問いが「言語問題」における枢要な論争点であったことに注目した。たとえば、トリッシーノやベルテッカリのような「イタリア主義者」は、「高貴な俗語」が「言語」の次元にあるものとして、自らが主張するイタリア共通語の根拠とした。それに対して、マキャヴェッリやマンゾーニのような「フィレンツェ主義者」は、「高貴な俗語」は文体上の様式にすぎないとして、フィレンツェ語の中心性を確保しようとした。本研究は、立場決定の試金石としての『俗語論』の役割に注目することで、イタリアの言語問題のもつ言語思想史上の意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study pays attention to the fact that the interpretation about the idea of "volgare illustre" proposed by Dante Alighieri in his work "Vulgari eloquentia" constitutes one of the most controversial points of the "questione della lingua" in Italy. Thus, "italianisti" like Trissino and Perticari looked for the support of their argument in Dante's work through considering the "volgare illustre" to be anchored in the dimension of "language". On the contrary, "fiorentinisti" like Machiavelli and Manzoni refuted the thesis of "italianisti" and regarded "volgare illustre" as a mode of expression of style in order to confirm the centrality of the language of Firenze in Italy. This study sheds light on the role of Dante's "Vulgari eloquentia" as the touchstone for taking positions in the controversy about the linguistic norm in Italy, and through it, makes clear the significance of the "questione della lingua" in the wider scope of the history of linguistic thought.

研究分野：言語思想史、言語社会学

キーワード：言語問題 イタリア 俗語論 言語規範

### 1. 研究開始当初の背景

イタリアの「言語問題」とは、イタリアの言語規範をめぐる14世紀から19世紀まで絶え間なく続けられた論争である。そこでは、言語規範の地理的位置づけ、規範となる文学者の選別、理想とされる文体などが争点となった。ダンテの『俗語の雄弁について』〔以下、俗語論〕は、イタリアにおける多様な俗語のなかの規範を確定する試みであり、その背景には文体の階層制(高尚体/中間体/低俗体)の考え方があった。初期の論争は文学言語のあり方をめぐるものだったが、18世紀後半からは国民語をめぐる議論に拡大し、19世紀のリソルジメント期には、イタリアの言語統一をめぐる議論に発展した。これは、言語問題が社会的次元にまで到達しただけでなく、文体の問題が「国民語」の規範の問題にまで入り込んだことを示す。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、イタリアの「言語問題」において、言語規範を支える文体の特徴がどのように認識されていたかを考察することにある。古典作家の選定、方言ないし話し言葉との関係、読者層や教育制度などの社会的要因が介入すると、時代に応じて文体の理想像は大きく変化する。そうした視点から「言語問題」における問題系の歴史の変容を跡づける。この問題はイタリア語だけでなく、多くの近代語の成立にとって重要な問いとなるはずである。

イタリアの「言語問題」においては、「言語」と「文体」の概念に関する抽象的な定義が問題とされたわけではない。けれども、さまざまな立場にたつ論者の異なる見解の衝突のなかから浮かび上がってくる問題系を「言語」と「文体」の間関係という視点から整理することができることもまた確かである。本研究では、「言語問題」という言説の集合体を貫く一本の糸として、ダンテの『俗語論』に関する解釈の変遷を取り上げる。なぜなら、ダンテが『俗語論』で提出した「高貴な俗語」の理念は、言語的次元に成立するのか、あるいは文体の次元で成立するのかという問いに対する答えが、さまざまな論者の立場決定の試金石となったからである。この視点をとることによって、「言語問題」の通時的な一貫性を明らかにすることができる。また、『俗語論』というテキストが19世紀に至るまで激しい論争を誘発する問題提起の書であったことを合わせて明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究はおもに文献調査によって進められる。過去の文学者や思想家が著した著作をつぶさに検討するとともに、従来は光に当てられなかった著作の再検討をも目指す。研究では、まず言語と文体の階層制に関する論争の典型例として、イタリアの「言語問題」の新たな視点からの読み直しを行なう。そのた

めに、14世紀から19世紀に至るまで続いた「言語問題」に登場する多くの作家を通時的に取り上げ、「言語問題」におけるテーマ系の連続性と不連続性を明らかにする。

本研究では、時代の変化に留意しながら、「言語問題」全体を「再帰的なテーマに集約される言説の集合体」ととらえる。この「再帰性」はイタリアの「言語問題」の内部におけるだけでなく、他の社会の言語問題についても当てはまることが予想される。したがって、こうした方法論は、他の事例との比較研究を行う場合にも有効である。

### 4. 研究成果

#### (1) 『俗語論』における「高貴な俗語」

ダンテの『俗語論』は、中世を通じて支配言語として君臨したラテン語に対抗して、俗語の地位の向上をはかった書物として言及されることが多い。しかし、『俗語論』の内容をそれだけにまとめてしまうと、その著作のもつ微妙な陰影は失われる。その理由はまず、ダンテはあらゆる点で俗語がラテン語よりも優れていると主張したわけではないからであり、さらには、その書の主題は、ラテン語に対する俗語の優越性を証明することよりも、むしろイタリア半島に群れ成す俗語の統一的規範を打ち立てる試みであったからである。

ダンテは人間の言語を、生まれながらに覚える「俗語」と「ローマ人が文法と呼んでいた二次的言語活動」に分けたうえで、「このうちより高貴なのは俗語である」というテーゼを冒頭で提出する。その理由のひとつは、俗語は「自然的」であるのに対し、「文法」は「人為的」だからである。ここで「文法」と呼ばれるものは、「規則に基づく文学言語」としてのラテン語を指す。「自然」が「人為」よりも優位にあるのは、前者が神の創造物であるのに対し、後者が人間の作り出したものであるからである。したがって、俗語がラテン語より「高貴」であるのは神学的前提から来る演繹的帰結であり、なんらかの経験や観察から引き出された結論ではない。

『俗語論』において「文法」=ラテン語のもつ文化的価値はけっして否定されない。ダンテにとって、言語が高度な文体的様式による表現に到達することは、すなわち言語の社会的威信の獲得につながるものとしてとらえられた。『俗語論』のポイントはまさにここにある。

ダンテは、数における1、色における白、全存在物における神のように、すべての個物のなかに遍在するが特定の何者にも局在しない単純実体、理念的一者というものがあるといい、それを「イタリアの俗語」のなかに求めたときに得られるのが「高貴な俗語」の理念である。すなわち、イタリアのどの俗語とも同一でなく、すべての俗語の基準となるような俗語、それが「高貴な俗語」である。

この「高貴な俗語」という概念こそ、後世

の「言語問題」のなかで繰り広げられるさまざまな議論を生み出す大きな源泉となった。ダンテの『俗語論』は、文学的実践の指針をあたえると同時に、「イタリアの俗語」の同一性を証明することで、政治的分裂を超えた次元でイタリアの言語的共同性を打ち立てようとする試みであったともいえる。

## (2) 『俗語論』の発見と「イタリア語」

俗語の使用領域がしだいに拡大するにつれて、15世紀後半になると、ラテン語と俗語の対立は二者択一を迫る敵対関係ではなく、むしろ競合と継承の関係に置かれる。「言語問題」を誘発したひとつの条件として、15世紀末から生じたフィレンツェの政治的・文化的地位の相対的低下がある。その一方で、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョに代表される1300年代フィレンツェ文学は確実にイタリア全土に広まっていき、他の地方の文学者にとっても守るべき文学伝統とみなされるようになった。これらの要因が16世紀初頭に「言語問題」を誘発する背景にあった。

「言語問題」とは、イタリアにおける言語の規範がどうあるべきかという問題をめぐる論争であり、そこにはおおよそ次の三つの立場があった。

(a)1300年代フィレンツェ文学語を唯一の規範とみなす「純粋主義者」。

(b)イタリア全土の教養人が用いる「宮廷語」や文学者が用いる「共通語」を規範とみなす「イタリア主義者」。

(c)フィレンツェで用いられる口語慣用に規範の基礎を求める「フィレンツェ主義者」。

このうち(b)の立場にある者たちは、頻繁にダンテの『俗語論』を自らの主張の根拠とした。ある意味では、『俗語論』の発見が「言語問題」の発生のきっかけとなった。それは、ジョヴァン・ジョルジョ・トリッシーノが1515年頃にパドヴァで写本を発見した出来事に始まる。その内容を見て感激したトリッシーノは、フィレンツェの文学者たちのサークルに『俗語論』の存在を知らしめ、さらに1529年には自らのイタリア語訳を刊行するにいたる。ともあれ、この一連の出来事が火付け役となって、激しい論争が巻き起こることになる。

トリッシーノがまず持ち出すのは言語の名称についての議論である。トリッシーノは事物の分類原理である「類」「種」「個」の区別を言語にあてはめる。そうすると、言語における「類」は国民全体のことば(イタリア語など)、「種」は一地方のことば(トスカナ語など)、「個」は一都市のことば(フィレンツェ語など)となる。そのうえでトリッシーノは次のように論じる。ダンテとペトラルカの作品はすべてがフィレンツェの固有語で成り立ってはいない。そこには、シチリア語やロンバルディア語、さらに多くの他の地方のことばが見られる。したがって、ダンテやペトラルカの作品の言語を「フィレンツェ

語」や「トスカナ語」と名付けることはできない。それはひとえに「イタリア語(lingua italiana)」としか呼ぶほかない。そしてトリッシーノはこの議論の支えをダンテの『俗語論』に見出した。トリッシーノによれば、ダンテが「高貴な俗語」と呼んだことばは、まさにトリッシーノが「イタリア語」と呼ぶ共通語のことを指しているのである。

トリッシーノの説が注目を集めたのは、フィレンツェの中心性を否定する意図がそこに込められていたからである。これにすぐさま反応したのがマキャヴェッリである。マキャヴェッリは「われわれの言語についての叙説と対話」(執筆は1515年から16年にかけてと推定、1730年に匿名で出版)のなかで、トリッシーノの説を真っ向から否定した。

マキャヴェッリは、イタリア全土で共通の理解のもとに用いられる語があることを認める。しかしそれは、トリッシーノが主張したように、ダンテが「イタリア語」で書いたからではない。逆に、ダンテたちの著作を読むことを通じて、多くのフィレンツェ語の語彙が他の地方の人間にも受け入れられたからである。したがって、イタリアの「共通語」(トリッシーノ)とか「宮廷語」(カステリオーネ)とかと呼ばれている言語は存在しない。なぜなら、そのように呼ぶことのできるものは、すべてフィレンツェの作家とフィレンツェ語からその基礎を得ているからである。これがマキャヴェッリの結論である。

マキャヴェッリの議論が特徴的であるのは、「自然/技芸」の二分法が、ダンテの『俗語論』においてそうだったのとは異なり、完全に神学的含意がはぎとられている点にある。マキャヴェッリにとっての言語の「自然」とは、その土地で話されるままのことばの状態を指す。これをマキャヴェッリは言語の「慣用(uso)」と呼んだ。それに対して「人為」とは、文学的その他の意図や技巧をもって作成された書きことばを指す。マキャヴェッリは「人為は自然に逆らうことはできない」と述べ、言語の「慣用」の重要性を主張するのだが、この認識はそのままフィレンツェ語の言語的優越性を主張する根拠となりえた。

フィレンツェ語の言語的優越性を主張するフィレンツェ主義の流れは、1541年に設立されたフィレンツェ・アカデミーに引き継がれる。アカデミーが設立された背景には、フィレンツェの文化的中心性を取り戻そうとしたメディチ家出身のコジモ1世の文化政策があった。アカデミーが目指したのは、言語の「自然」と「技芸」の調停であった。フィレンツェの話しことば(=自然)と1300年代フィレンツェ文学(=技芸)は、同じフィレンツェ語の異なる側面としてたがいに補完しあう関係におかれる。たとえばヴァルキは、話す慣用から身につけた「言語(lingua)」と文学的形式に従った書き言葉、すなわち「文体(stile)」を区別したうえで、「言語」

においてはフィレンツェの口語慣用を、「文体」においては伝統的文学語を規範に設定した。最終的には、1583年に設立されたクルスカ・アカデミーにおいて、サルヴィアーティの理念が公に確立された。

### (3) 「言語問題」のあらたな展開

16世紀前半に、ベンボ、トリッシーノ、マキャヴェッリらの間の論争として始まった「言語問題」は、クルスカ・アカデミーの設立によって一定の決着を見た。アカデミーの任務は、1300年代のフィレンツェ語に言語の純粋性を見出し、それを保存することであった。その最初の成果として現れたのが、1612年に刊行された『クルスカ・アカデミー辞書』第一版である。これ以後の「言語問題」はクルスカ辞書をめぐる文学的議論に多くが費やされる。しかし、18世紀後半にフランス啓蒙主義の影響がイタリアに浸透し、文化と社会の変革を目指す知識人が出現するにしたがって、議論の枠組みに変化が生じはじめる。その代表がチェザロッチェである。

チェザロッチェは、ロックとコンディヤックの影響を受けた啓蒙主義思想家であるが、「言語問題」に関してはトリッシーノの立場を支持する一方で、サルヴィアーティとクルスカ・アカデミーを厳しく批判した。チェザロッチェは、言語は少数の文学者のものではなく、「多数者」すなわち「国民」のものであるという。チェザロッチェは、フィレンツェにクルスカ・アカデミーに代わる「国民評議会」の設立を提案したほどである。こうした認識が入口になって、チェザロッチェの議論にダンテの「高貴な俗語」の概念が入りこんでくる。チェザロッチェによれば、イタリアに共通の文化言語は特定の都市で話される必要はなく、優れた全国の作家たちによる洗練化の過程を経た書きことばであるべきであるという。そしてこれこそまさにダンテが「高貴な俗語」と呼んだことばである、とチェザロッチェはいう。

こうしてダンテの「高貴な俗語」の理念は、クルスカに批判的な啓蒙主義者たちの言説のなかで息を吹き返した。18世紀後半以降、「高貴な俗語」は「イタリア全土の教養人が支える文化的書きことばとしての国民語」と読み替えられて、啓蒙主義言語論を支える重要な柱となっていくのである。

この流れのなかで重要な人物は19世紀前半に活躍したジュリオ・ペルティカリである。ペルティカリは、当時最新のロマンス語文献学の成果に基づいて、ダンテの「高貴な俗語」の意味を解釈しなおした。それによると、ラテン語からイタリア語などのロマンス諸語が生まれる以前に、ローマ帝国の版図で共通に話されるひとつの言語があったという。しかし、このことばは当時のひとびとにとって「粗野」なことばとみなされていたため、文字に書きとめられなかった。ペルティカリによれば、ダンテが『俗語論』でやろう

としたのは、「庶民」が話す多数の粗野なことばから、洗練された音声、語彙、統辞法、文体をもった「高貴な俗語」を選別し、書きことばとして定着させることにあったというのである。

ペルティカリの立場が際立っているのは、こうした言語規範の選別作業が、トスカナやフィレンツェだけで行われたのではなく、イタリア全土にちらばる知識人によって手がけられたと主張したことにある。こうしてイタリアの言語と文学の歴史におけるフィレンツェの中心性は明確に否定される。そのときダンテの「高貴な俗語」の理念は、「イタリア共通語」の存在を証明してくれる貴重な証拠物件となったのである。

### (4) マンゾーニの言語理論

小説家アレッシンドロ・マンゾーニは代表作『いいなづけ』を執筆する過程で、小説に用いるべき言語と文体の問題に直面し、理論的な観点から言語について考察する必要にせまられた。マンゾーニの言語理論の一端は、1847年に刊行された書簡論文『イタリア語について』で公にされた。この著作で重要なのは、言語の「一体性(*unità*)」の概念であり、もうひとつは「書きことば」に対するマンゾーニの考え方である。

マンゾーニは「イタリア語はフィレンツェにある」という命題を提出して、イタリア主義者の立場を否定する。マンゾーニの批判は、「イタリア語(*lingua italiana*)」というのであれば、「イタリア的(*italiana*)」か否かである以前に、そもそもそれが「言語(*lingua*)」の名に値するかどうかを問わねばならないというものであった。マンゾーニは、「部分が欠けた言語というのは、矛盾した概念である。言語はひとつの全体として存在するか、あるいは存在しないかのいずれかである」(Manzoni 2000:11)という。「言語」とは語彙の寄せ集めではなく、統一した社会において、日常で絶え間なくおこる避けることのできないあらゆる結びつきから必然的に生まれる諸記号の全体性」(Manzoni 2000:63)である。マンゾーニによれば、イタリア主義者の主張する「イタリア語」は言語の名に値しないのである。

とはいえ、現実のイタリアには多くの「方言」が満ちあふれている。したがって、言語統一を望むのであれば、「多様性を一体性に置きかえる」(Manzoni 2000:19)ことが必要になる。こうして、フィレンツェで話される口語慣用を全土に普及させることによりイタリアの言語統一をなしとげるといふ言語計画が素描され、1868年の「言語統一に関する報告」では、この点が大きくとりあげられる。マンゾーニは、みずからの作家としての言語的経験を通して理論的に引き出した一般原理を、イタリア社会が直面する言語問題を解決するために、なんらの修正もなしに適用したともいえ、この点にマンゾーニ理論

の特異性がある。

「書きことば」に対するマンゾーニの見解にも、そうした特異性が現われている。マンゾーニによれば、「言語」はそれを支える社会的コミュニケーションがあってはじめて成立する。しかし、それは話しことばを通じてであって、書きことばによってではない。したがって、「書きことば」とはそもそも「言語」としての資格をもたないというのである。マンゾーニによれば、「書きことば (lingua scritta)」という言いまわしは、ことばの真正銘の誤用であり、比喩にすぎない。当代随一の文学者が「書きことば」の価値と存在を否定したこと、まさにこの点にマンゾーニ理論の画期的な意味がある。

#### (5) マンゾーニの『俗語論』解釈

『俗語論』に関するマンゾーニの議論は、1868年に発表されたマンゾーニの報告が引き起こした論争のなかに位置づけられる。1867年10月に文部大臣に任命されたエミリオ・プロリオは、1868年1月の省令で、懸案であったイタリアの言語統一の問題に取り組むための委員会を設置した。この委員会は二つの部会に分けられ、ひとつはマンゾーニを座長とするミラノ部会、もうひとつはランブルスキーニを座長とするフィレンツェ部会であり、全体の委員長はマンゾーニが、副委員長はランブルスキーニが務めるという構成であった。委員会が結成されてからまもない1868年2月にマンゾーニは大臣プロリオに宛てて報告書を提出する。それが「言語の一体性とそれを普及させる手段について」と題された報告である。この報告書はフィレンツェとミラノの雑誌に掲載され、これ以後マンゾーニの支持者と反対者のあいだでの激しい論争が生まれる。

マンゾーニの論説「ダンテ・アリギエリの書『俗語論』についての手紙」は、同じくミラノ部会に属していたルッジエーロ・ボンギに宛てた手紙に基づいており、1868年3月にミラノの雑誌に発表された。この「手紙」は、文部大臣に提出した「報告」でダンテの『俗語論』に言及しなかった理由をボンギに説明するという設定で書かれている。マンゾーニは、『俗語論』が16世紀にトリッシーノによって「発見」された『俗語論』が、19世紀にはペルティカリの著作によって再び脚光を浴びたことを指摘する。しかし、マンゾーニによれば、『俗語論』はいたるところで引用されるが、正確に読まれていない。だからこそ、「その書のなかでダンテはイタリア語 (lingua italiana) を定義しようとしたという謬見」(Manzoni 2000:112) がこれほど広まっている、とマンゾーニはいう。マンゾーニは、「イタリア語の問題に関して、この本〔俗語論〕は埒外にある。その本のなかでイタリア語のことはいささかも論じられていない」(Manzoni 2000:112) と断言するのである。マンゾーニはダンテが「高貴な俗語」

を定義した箇所を引用して、そこに「『言語』とは一言も書かれていない (Lingua, mai)」ことに注意を向ける。ここでマンゾーニは『俗語論』の行論に自らの「言語」概念を読みこんでいる。マンゾーニの言語論のすべては、この「言語」の概念——社会的交流に役立つ「慣用」に支えられた「一体性」をもつ記号の総体——を出発点として成り立っていた。マンゾーニは、「高貴な俗語」とは文学において特定の題材をあつかうための文体の様式であるにとらえることで、ダンテの「高貴な俗語」とは「イタリア共通語」を指すと主張する者の主張の根拠そのものを切り崩そうとするのである。マンゾーニの結論はこうである。「『俗語論』という書物のなかで、イタリア語にせよ、他の何にせよ、言語 (lingua) のことは論じられていない。」(Manzoni 2000:119)

マンゾーニの主張に無理があることは歴然としている。たしかにその書の第二部では詩の表現法のこと書かれているにはちがいないが、第一部では、言語の起源やイタリアの方言分類を論じた部分を見ればあきらかであるように、「言語」のことが論じられているからである。しかし、それではマンゾーニはなぜ無理を承知の上で『俗語論』では「言語」の問題は論じられていないと力説しなければならなかったのだろうか。

それは、ダンテの「高貴な俗語」の概念がマンゾーニの言語理論と両立しえない性格のものだったからである。「高貴な俗語」は「理念的一者」として「イタリアのどの都市にも局在しないがイタリア全土のことばの尺度となることば」としてとらえられた。ところが、マンゾーニによれば、言語とは特定の社会にささえられた一体性をもっていないなければならない。だからこそ、ペルティカリのいう「イタリア共通語」は存在しないのだし、未来の「イタリア語」はフィレンツェ語が全土に広まることによってのみ達成されるのである。もし「どの都市にも局在しない」というのであれば、そのことばはそもそも「言語」ではない。つまり、「高貴な俗語」は、マンゾーニの言語理論の根幹をなす言語の「一体性」の原理に抵触するのである。

そしてもうひとつ重要なのは、マンゾーニが「書きことば」を言語的実在とみなさない点である。マンゾーニは、「書く」という行為が社会的コミュニケーションを成立させることはできないとみなしていた。ところが、「高貴な俗語」は話しことばから分離した書きことばとしてしか成立しない。しかし、マンゾーニの見方によれば、「高貴な俗語」が「書きことば」としてしか存在しえないというのなら、それは「高貴な俗語」が「言語」でないことの証明なのである。

実はマンゾーニにとっても、『俗語論』そのものが敵だったわけではない。むしろ、『俗語論』を根拠にして提示されてきた「イタリア共通語」の理念をどうしても否定しなけれ

ばならなかったのです。つまり、マンゾーニの俗語論解釈は、こうした「イタリア主義者」たちの議論の根拠を掘り崩すために書かれたといえる。マンゾーニによれば、真の国民語は話しことばとして成り立たねばならなかったのである。

「言語問題」をもっとも深く考察した研究者のひとりであるヴィターレは、「イタリア語の歴史のなかで、アレッサンドロ・マンゾーニという言語理論家にして作家の著作の重要性に比肩しうるのは、唯一ダンテの著作のみである」(Vitale 1992:205)と述べた。とはいえ、「言語問題」のはじめと終わりをなすこの二人が、理論的にはすれちがわざるをえなかったことは、きわめて象徴的である。

#### (6) 結論

イタリアの「言語問題」の枠組みのなかで、ダンテの『俗語論』がどのように解釈され、どのように評価されてきたかを見てきた。そこからわかるのは、『俗語論』が「言語問題」の流れのなかで特定の立場の根拠として利用されたり、逆に、仮想敵として否定されたりしてきたことである。簡単にいえば、『俗語論』は、一定の意味内容が収められたテキストではなく、立場に応じてさまざまな解釈を受ける「論争の書」でありつづけたのである。論争の最大の焦点になったのは、ダンテのいう「高貴な俗語」は「言語」の次元のものなのか、それとも「文体」の次元のものなのかという論点である。この点に関しては、マキャヴェッリやマンゾーニのようなフィレンツェ中心主義の立場を取るものは「高貴な俗語」を文体上の一様式とみなし、トリッシーノやペルティカリのような「イタリア主義者」はそれを実在する「言語」とみなした。「言語問題」の文脈でだれかが何かを主張したなら、『俗語論』はその者の真意を測るリトマス試験紙のような役割を果たしていた。こうした事態は「言語」と「文体」との関係がダンテの特定のテキストをめぐって特定化されたことを意味する。まさにこの点にこそ、イタリアの「言語問題」のもつ特異性がある。

#### 引用文献

Manzoni, Alessandro, 2000, *Scritti linguistici editi, Edizione nazionale ed europea delle opera di Alessandro Manzoni*, Vol. 19, a cura di Angelo Stella e Maurizio Vitale, Milano: Centro nazionale studi manzoniani,  
Vitale, Maurizio, 1992, *Studi di storia della lingua italiana*, Milano: LED.

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

糟谷 啓介、イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念( ) ダン

テ『俗語論』はどのように読まれたか、『言語社会』12号、一橋大学大学院言語社会研究科紀要、査読無、2018年3月、pp.384-404。

糟谷 啓介、イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念( ) ダンテ『俗語論』はどのように読まれたか、『言語社会』11号、一橋大学大学院言語社会研究科紀要、2017年3月、pp.260-282。

糟谷 啓介、イタリアの「言語問題」における言語と文体の概念( ) ダンテ『俗語論』はどのように読まれたか、『言語社会』10号、一橋大学大学院言語社会研究科紀要、2016年3月、pp.364-386。

〔図書〕(計1件)

糟谷 啓介、ソミヨン出版(ソウル)

(韓国語、「言語・ヘゲモニー・権力 言語思想史のアプローチ」)、コ・ヨンジン、ヒョン・ジニ訳、2016年、総頁数393頁。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

糟谷 啓介 (KASUYA, Keisuke)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：10192535